森の小母さん

北川 千代

その欅の木のことを、みんなは小母さんと呼んでいました。それはその欅の木が本当に親切で、泊まるところのない小鳥にお宿を貸してやったり、暑さに苦しんでいる獣たちに涼しい木陰をこしらえてやったり、または弱い木や葉が強い風に当たらないよう、風よけになってやったりして、そしてみんなの喜ぶのを、まるで自分のことのように喜んでいたからでした。

その欅の小母さんのところへ、ある日の夕方、どこから来たか一つの小さな木の種が疲れたように空を飛んで、枝の上に止まりました。

「小母さん、どうぞ私を泊めてくださいな。」

と、その木の種は言いました。

「私はもうくたびれて飛んでいけなくなったのです。」

「あああいいとも、ゆっくり泊まっていきなさい。」

小母さんはにこにこしながら答えました、それで種はうれしそうに小母さんに幾度も幾度もお礼を言って、小母さんの枝のいちばん高いとこに、しっかり腰を下ろしました。

「小母さん、なんといういい眺めでしょう。どうぞ私をいつまでも、ここに置いてくださいね。」

「ああいいともいいとも、おまえさんのいたいだけいるがいいよ。」

そこへ飛んできたのは、小母さんと仲良しのこまどりでした。こまどりは泊まる支度をしている見慣れない木の種を見ると、心配そうに、小さい声で小母さんに言いました。

「小母さんあの木の種はどうもよくないやつのようではありませんか。あんな者をうっかり泊めてやって、どんな悪いことが起こるかもしれませんよ。今のうちに断っておしまいなさいな。」

けれど小母さんはかぶりを振りました。

「だって、そんなかわいそうなことはできないよ。泊まるところがないと言うのですもの。まあ、あれが悪者だからって、あんな小さい者に何ができるものですか、私はこんなに大きいのですからね。」

それでこまどりは、黙ってため息をつきました。

「ああ小母さんはいいひとだが、いいひとすぎてあんまり誰にも親切にしすぎる。小母さんの親切を、逆に利用する悪いやつが、ないとも限らないのだがなあ。——私はなんだかよくないことが、今に起こりそうで心配だ。」

——しかしこまどりはなんにも言わず、そのまま飛んでいきました。

二、三日してからのことでした。

一匹の狼が、小母さんのところへやってきて頼みました。

「小母さん小母さん、すみませんがあなたの根もとで、爪を研がしてくださいな。そうでないと私は食べ物をとることができないので、ひもじくってたまらないのです。」

親切な小母さんは気の毒に思って、優しく言いました。

「いいともいいとも、さあよく爪を研いでおいで。ひもじいなんてかわいそうに。」

狼は喜んで、すぐに爪を磨き始めました。それはずいぶん乱暴で、小母さんの足の皮は剥け、

痛くてたまらなかったのですが、小母さんはじっと我慢をしていました。自分さえ我慢していれば、狼は爪を研げて、食べ物をとりにいかれるのだと思うと、痛いのも辛抱しなければ――と思ったのです。けれど狼は、小母さんがそんな辛抱をしているのも知らないように、自分の爪が研げてしまうと、小母さんにお礼も言わずに、森の奥へ一散に駆けていってしまいました。ずいぶん自分勝手なひどいことだと思いましたが、優しい小母さんはすぐに考え直しました。

「お礼を言うのも忘れるほどあの狼はおなかがすいていたのだろう。かわいそうに、かわいそうに――。」

でも、狼にこすられた足は、ひどい痛さで痛みだしてきました。小母さんは、その痛さをこらえるように、じっと目をつぶっていますと、そこへいつものこまどりが、ちょうど飛んでまいりました。

「小母さん小母さん、どうかしたんですか。」

と、こまどりは聞きました。

「いいえ。ただ足が痛むだけよ。なんでもない、じきに治るのさ。」

そう言われてこまどりは、小母さんの足のところを見ました。その足は皮が剥がれ、肉が白くはみ出していました。

「まあひどいことをする。誰です、こんな乱暴をしたのは。」

こまどりは怒ったように言いました。小母さんはそれをなだめるように

「いいのだよ。慌てたのでついしたのだろうからね。狼だって死にそうにきっとひもじかったのだよ。――狼が爪を磨いたんだよ。」

「狼が爪を磨いたんだって。」

と、こまどりは顔色を変えました。

「そうだよ。なんにも食べずにひもじいのだって――。」

そこへ一匹の子兎が、しくしく泣きながら通りました。親切な小母さんは、自分の傷の痛みも忘れて、優しく声をかけました。

「おや。兎の坊やどうしたの。なにをそんなに泣いているの。お母さんに叱られたのかい。」

兎の子供は首を振りました。

「そうじゃないの。お母さんが食べられてしまったのよ。私それで独りぼっちになったのよ。」

「まあひどい。そんなひどいことを誰がしたの。」

「狼がよ。」

「狼が……。」

小母さんはびっくりして聞き返しました。

「そうなの。このあいだからおうちを狙っていたのだけれど、爪が研げないのでだめだったの。それが今日ね、爪をどこかで研いできたのよ。」

「爪を研いできたのだって――まあ、あの、狼が食べたのだって。」

小母さんは思わずそう言って、蒼白になりました。

「まあどうしよう。さっきのあの狼にちがいない……。」

こまどりは小母さんの胸のところまで飛び上がって言いました。

「ごらんなさい小母さん。誰にでも親切にすることも考えものではありませんか。狼が爪を研がなかったら、兎は助かっていたのですよ。この子を独りぼっちにしたのは、つまり小母さんの親切です。」

「ああ、どうしよう。私はそんなはずではなかった。」
「だから私がこのあいだも言ったでしょう。親切も相手をみておしなさいって。あなたのところに泊まっているあの木だって、どんなことをするかわかりませんよ。あれはきっと小母さんに今に迷惑をかけますよ。」
「あんまり悪口を言うのはよいことではないよ、こまどりさん。私はあの木をそんな悪者とは思わない。おとなしくって、静かで――あんまり気が弱いから、一本立ちをするのを怖がって、あしてうちに泊まっているんだよ。」
「気が弱いからですって――気が弱いかどうかしらないが、私はいつまでもひとの家に厄介になって、ごろごろしているやつは大嫌いです。そんなやつに、どうせろくな者はありはしない。――でも、小母さんがそうおっしゃるなら、私は無理にも安心していましょう。さようなら、また来ますよ。」
こまどりはそう言って、自分の家へ帰ってしまいました。
それからひと月ばかりの間は、こまどりは自分の家に赤ちゃんが生まれたり、お引っ越しをしたりして、小母さんのところへ訪ねていくことができませんでした。けれど森の他の小鳥から、この頃小母さんが加減が悪いということを聞いたので、びっくりして飛んできました。
「小母さん、ご病気だってどんなです。」
そう言って聞きますと、小母さんは元気のない顔を上げて
「ああ、頭が痛くってね。それにいくらごちそうを食べても、ちっとも滋養にならないのだよ。なんだかだんだん痩せてくるような気がするよ。」
「いったいどうしたのでしょうね。」

言いながらこまどりは、ふと、小母さんの頭の上を見上げました。と、そこにはいつかの木の種が、今は立派に大きくなって、瑞々と茂っていました。
「ああ、あいつだな。小母さんの食べるごちそうを、みんな横取りしてしまうのは……。」
そう思ったこまどりは、急いでその木のところへ飛んでいきました。
「おい、君だろう。小母さんをあんなに弱らせてしまったのは。」
「あはははは。」
と、その木は大きな声で笑いました。
「弱ったかどうかそんなことは僕は知らない。だけど僕は小母さんから、ごちそうを分けてもらっているのさ。それは僕の生まれつきさ。」
その木の平気な顔を見ると、こまどりは怒鳴りました。
「きさまはいったいどこの誰だ。」
「僕はやどり木というものさ。方々の木の枝に根を張って、その木のごちそうを食べる木さ。」
こまどりはびっくりしました。だって小さいときにお父さんに、その悪い木のことを聞いたことがあったからです。
「さあ大変だ。こいつを早くどこかへやらなければ、小母さんはおしまいに死んでしまうぞ。」
けれど相手がずるいやつですから、うっかりしたことは言えません。そこでこまどりは脅かしました。
「君はね、小母さんの食べ物を横取りして、そう太っているけれども、今に小母さんが弱って死んでしまってみろ。君の命だってないのだぜ。だからあんまり欲張って、小母さんを病気にしては君の損だよ。」

「いいよ。そんなことはかまわない。」
と、やどり木は言い返しました。
「僕はその頃また他の木へ、風に乗って飛んでいってしまうからね。この森にはこんなにたくさん木があるんだもの、どこへ行ったって困りはしない。それに僕がここへ来たときには、たった独りぼっちだったけれど、今ではこんなに大勢子供がいるのだから、どんなやつだって負かしてしまう。もう頼んで置いてもらわなくたって、大いばりでどこへでも宿がとれるのだ。」
「君は小母さんの親切を忘れたのか。」
「忘れはしないよ。僕がこんなに大きくなれたのは小母さんのおかげさ。僕の子孫がこの森に増えていかれるのも、僕を助けてくれた小母さんのおかげさ。その親切は忘れないよ。」
「ばか。うそつき。恥知らず。」
と、こまどりは腹が立って、思わず大きな声で怒鳴りつけました。
「きさまはこの森中に迷惑をかける気なのか。」
「なんとでも言いたまえ、もうこうなればこっちのものさ。僕はもう独りぼっちの旅のやどり木の種ではないんだからね、今になって慌てたってしかたがないさ。やどり木ほど有名なものを、知らなかったほうがばかなんだから――さあ、突っつくならそのくちばしで突っついてみろ、君のくちばしが触れたが最後、すぐさま種が八方へ飛び出すから。」
こまどりはもうなんとも言う言葉がなく、黙っていました。しかし弱った小母さんの顔を見るだけの勇気がなかったので、そのまま家に帰りました。
「困ったものだ。こういうことが、ありはしないかと、心配していたのに。」
だんだん日がたち、月がたつうちに、やどり木はますます増えていきました。もう小母さんの体じゅう、やどり木でいっぱいでした。そして、それとあべこべに、小母さんはだんだん弱って、とうとうある日枯れてしまったのでした。
「親切な小母さんは死んでしまった。」
森の中の木や草や鳥や獣が、みんな悲しんでいるうちに、やどり木の仲間は引っ越しの支度をしました。
「さあ今度は別々に、森の木の方々に陣取るのだぞ。」
風に乗ってやどり木の種たちは、森の八方に飛んでいきました。そして、小母さんのお葬式でごたごたしている木の上に、めいめい宿を決めました。
「さあもうこれで大丈夫だ。森中の木が気がついたら、さぞびっくりするだろうな。」
と、やどり木たちは大きい声で笑いました。
小母さんを枯らしたやどり木が、自分たちの頭の上にいつの間にか宿っていることに気がつくと、森中の木はみんなびっくりしました。
「まあ大変だ、どうしよう。私たちも今に殺されてしまう。」
けれど今更騒いでも、どうなることでもありません。やどり木はだんだん増えていきます。木たちはだんだん弱っていきます。それで森の木はみんな、昔小母さんが優しく親切だったことは忘れて、いらない小母さんの親切を、恨むようになりました。

〈出典『日本児童文学大系第二二巻　北川千代　壷井栄集』（ほるぷ出版、一九七八年）〉

【著者】北川　千代（きたがわ　ちよ）
一八九四（明治二七）年―一九六五（昭和四〇）年
児童文学作家。埼玉県の生まれ。
【著書】「絹糸（きぬいと）の草履（ぞうり）」「母の幻（まぼろし）」「子供と太陽」など